

J.F.Oberlin (オベリン) の教育カリキュラムと コメニウス『大教授学』の理念

海 津 淳

キーワード：J.F.Oberlin (オベリン)、コメニウス『大教授学』、汎教育、学校

序

16 世紀末チェコに生まれた近代教育学の父、コメニウス Jan Amos Comenius (1592-1670) の教育思想は、その当時から現代に至るまで教育学領域における高い評価を保ち続けている。なかんずく代表的著作『大教授学』*Magna Didactica* は彼の教育理念の根本を展開して、現代の読者にも大いなる示唆を与えて余りある作品である。さて一方 18 世紀フランス、アルザスの教育家 Jean Frédéric Oberlin (オベリン) (1740-1826) は、牧師として赴任したバン・ドウ・ラ・ロッシュにおける貧困解消と教育実践に尽力した人物であり、その教育の近代性は教育制度未確立の当時において特筆すべきものでありながら、生涯一冊の著作も残さなかった故にその名を知る人は決して多くない。時代的にも地域的にもこの 2 人に直接的接点はない。しかしながらこの Oberlin (オベリン) が彼の学校においてコメニウスの『世界図絵』*Orbis sensualium pictus* を使用したことが知られており、少なからぬコメニウスの影響も指摘されている¹。

本稿では、コメニウスの『大教授学』に見る理念と、このアルザスの教育実践家との共通項を検証しつつ、デカルトとも親交のあった汎ヨーロッパ的教育思想家の理念が一世紀半の時を経、アルザスの一地方でいかに実践されたかを考察することを目的とするものである。なおここでは、Oberlin (オベリン) の実践におけるコメニウスの理念の反映を論ずるものとし、彼の実践における『大教授学』との詳細な内容の対比については別の機会に稿を改めて検証したい。

1. コメニウスと『大教授学』

1) コメニウスの生涯

コメニウスは 1592 年、現在のチェコ中部モラヴィア地方ニヴニツェに生まれたとされる²。幼くして父を、さらに母や姉たちを相次いで失った彼は親戚に引き取られ、ボヘ

ミア兄弟団³によるラテン語学校に学んだ。その後 1611 年からドイツ、ヘルボルンの大学で神学を修め 1614 年帰国、プジェロフでボヘミア兄弟団の学校の教師となり、さらにその後フルネックにて同教団運営の学校の校長に任ぜられ同時に教団の司祭に叙階される。

しかし彼がフルネックに居を定めた 1618 年、かの三十年戦争が勃発する。ボヘミア王国から上がった火の手が後にフランス、スウェーデンなどヨーロッパ各国を巻き込んでゆくこの国際戦争は、ボヘミア王国の覇権をめぐるボヘミア・プロテスタント諸侯とカトリックであるドイツ、ハプスブルク勢力間の抗争に端を発する。この対立の影響は、フス派の一派であるボヘミア兄弟団の聖職者コメニウスに直截的に降りかかった。1620 年のビーラー・ホラ（白山）の戦いでプロテスタント諸侯が敗退して後、ボヘミア王国の政権を握ったドイツ勢力により 1627 年にカトリックが公式宗教化されプロテスタント追放令が出されて以来、コメニウスは生涯にわたる亡命生活を余儀なくされることとなる⁴。

1628 年 2 月、コメニウスは兄弟団のメンバーを率いてポーランド、レシュノに入り、ラファエル・レツィンスキ侯 Raphael Leszynski の保護を受ける。彼が同地で教師、校長として学校教育に関わってゆくなかで『開かれた言語の扉』*Janua linguarum reserata* (1631) が出版され、新しい効果的な言語学習法について論じたこの作品は、その後ヨーロッパの 12 言語に翻訳されるほどの高評を獲得している。コメニウスの名声は次第に高まり、ヨーロッパ中から嘱望される教育思想家として招聘を受けるに至り、例えばイギリスのハートリブ Samuel Hartlib (1600-1662)⁵ は学校設置のために議会の承認を得て彼を招き (1641)⁶、良く知られた例として 1646 年から 1648 年までクリ스티ナ女王の招聘を受けてスウェーデンに滞在している。1650 年にはハンガリーに招かれシャロシュ・パタクの学校改革に従事、1652 年レシュノに帰還する⁷が 1656 年スウェーデンのポーランド侵攻によってコメニウスはアムステルダムへ移り、1670 年、再び故国の地を踏むことなく同地で世を去った。

2) コメニウスの著作

チェコ（モラヴィアおよびボヘミア）に生まれながらも戦火のために亡命を余儀なくされ、しかしそれによってヨーロッパ中に知られる存在となったコメニウスは、先の『大教授学』以外にも多くの注目すべき著作を残した。ここではそれらのうち代表的な作品のいくつかについて記述する。

1. 『地上の迷宮と魂の楽園』*Labyrint sveta a ráj srdce* (1663)

三十年戦争勃発の後、コメニウスが国内逃亡の途中で著し 1631 年に『地上の迷宮と魂の別荘』*Labyrint sveta a luthauz srdce*. (1631) として出版され、後にアムステルダムにおいて現在の題名で出版された作品である。主人公の「巡礼」がこの世という「迷宮」の様々な虚偽と暗愚を目にし、最後に天における「魂の楽園」を見出すという物語であり、政治、社会、教育、宗教批判の書である。後の『大教授学』に展開される「すべての人にすべてのことを」教える汎教育への希求とその根拠を、ここに

示されるあらゆる階層の愚かさに対する救済手段として読み取ることが可能であろう。

2. 『開かれた言語の扉』 *Janua linguarum reserata* (1631)

ラテン語の効果的な教授法を記した教科書であり、先述の通り亡命先のポーランドで執筆された。コメニウスの名をヨーロッパに知らしめた著作のひとつであるが、のみならずその後も長期間ラテン語教科書として使用された実用性も看過できない。従来の非効率的な教授法への批判からコメニウスは学習における言語と事物の関係を重視し、100の事物をラテン語によって解説するという形式をとっており、現代においては教科書であると同時に汎知学的観点からも評価されている⁸。

3. 『世界図絵』 *Orbis sensualium pictus* (1658)

邦訳出版もなされているコメニウスの代表的著作のひとつで、世界初の絵入り教科書として知られる。ここでとりあげられるテーマとしては、「神」に始まり「世界」「天空」「火」「空気」「水」など天文・自然から「果樹」「花」「野菜」「動物と鳥」「爬虫類」「川と湖の魚」などの植物・生物、「人間の身体」「脈管と骨格」等解剖学的解説などから、職業や共同体など人間社会構造、道徳、宗教的観念等に至るまで幅広い項目が挿絵とラテン語によって解説されている。対象となる事項の多様さと挿絵を使い視覚という感覚に訴える斬新な教授方法によって、コメニウスにおける「汎知学」と「直観教授」双方を体現した著作である。

4. 『大教授学』 *Magna Didactica*

コメニウスの代名詞たる教授法に関する著作であり、冒頭のタイトル「大教授学」*Didactica Magna*に続く「すべての人にすべての事柄を教授する普遍的技巧を提示する」*universale omnes omnia docendi artificum exhibens*という彼の汎知学、汎教育の思想を象徴する言葉によって知られている。

コメニウスはこの5作品にとどまらず多数の重要な著作を残しているが、ここでは続く章にて『大教授学』とそこに示される理念について概観してゆきたい。

2. 『大教授学』とその理念

1) 『大教授学』の出版

まずこの『大教授学』の成立について簡単に触れておきたいが、コメニウスは『大教授学』執筆・出版以前にチェコ語による『教授学』を著している。この作品の成立に関しては不明な点も残っているようであるが、1628年、彼がポーランドに亡命した年に起草され1632年に完成されたようである⁹。この作品はその後ボヘミアの政治的事情により草稿のまま残され、出版という形で公に姿を現すのは1849年を待たねばならなかった。しかしコメニウスはこのチェコ語の著作をラテン語で執筆することを計画し、こちらは1657年アムステルダムで刊行された『教授学著作全集』*Opera Didactica Omnia*の中に収められることとなる。

その内容は、先にも触れたタイトルに明快に示される通り「すべての人にすべての事柄を教授する普遍的技法を提示する」「教授学」である。その技巧を様々な側面から論じ提起してゆくのがこの著作の目的であるが、17世紀には無論公教育制度など確立されておらず、「すべての人」が教育に与るといえるようなことは絵空事に等しい時代であった。そうした時代状況の踏まえれば、この副題ひとつでさえ人々を瞠目させるに十分である。それを可能ならしめる「普遍的技法」を示そうというものであり、具体的には、感覚を通して生じる認識の働きに基づくいわゆる直観教授、教科書の採用、子供の成長段階を意識した学校とその内部で組織されるべき学級制などが提起され、その論拠と方法が精細に展開されてゆく。

全編は序言としての「読者への挨拶」、献辞（「すべての人間界の責任者、（すなわち）政治指導者、教会牧師、学校の校長、教師、保護者に一聖霊の恩寵によって、我らの主イエス・キリストの父である神の平和のうちに」）、「教授技術の重要性」の3章と、それらに続く以下の33章から構成されている。

- 第1章 人間は最も完璧で最も卓越した被造物である
- 第2章 人間の究極的目的はこの世の外にある
- 第3章 現世の生は永遠の生命へ準備に他ならない
- 第4章 永遠への準備には3段階がある—自分自身を知り支配し神に向けることであり、同時にそれはすべてのものに関しても同様である
- 第5章 自然は、学識、徳性、宗教性の種子を、私たちの中に蒔いている
- 第6章 人間は人間になるために、人間として形成される必要がある
- 第7章 少年時代は人間を形成する最善の時期であり、遅ればその目的を達し得ない
- 第8章 青少年は一緒に形成し、学校が必要である
- 第9章 男女両性のすべての青少年が学校に託されねばならない
- 第10章 学校での教育は普遍的であらねばならない
- 第11章 現在まで目的に答える学校はなかった
- 第12章 学校を改革し改善することは可能である
- 第13章 学校改革の基本はすべての組織的な秩序にある
- 第14章 学校の秩序は自然から創案されるべきであり、それにはいささかの障害もない
- 第15章 生命を長らえる基礎
- 第16章 教授と学習の全般的要件 すなわち成功せずにはいない種類の教授、学習法
- 第17章 容易な教授法と学習法の基礎
- 第18章 確実な教授法と学習法の基礎
- 第19章 迅速に教授するための基礎的法則
- 第20章 知識の教授に関する各論的方法
- 第21章 技術と職業に関する教授方法
- 第22章 言語に関する教授方法

- 第23章 徳行に関する教授方法
- 第24章 敬神に導く方法
- 第25章 古典作品についてーキリスト教の真の規則によって学校を再構築することを望むならば、異教的作品を排除するか今まで以上の注意を払って採用しなければならない
- 第26章 学校の規律について
- 第27章 年齢と発達段階に従って構築された学校の四段階について
- 第28章 母親学校の原型
- 第29章 母国語学校の原型
- 第30章 ラテン語学校の構想
- 第31章 大学 (Academia) について
- 第32章 普遍的な学校の秩序
- 第33章 この普遍的教授方法を実現するために必要な条件について

さて「すべての人にすべてのことを」はいわばこの著作の代名詞であるが、『大教授学』においてはこの他にもいくつかの章句が知られており、なかでも「人類を破滅から救うのは教育のみ」という言葉はこの著作の中で繰り返し現れる重要な主張である。誇張、大言壮語とも見えるあまりに大仰な言い回しであるが、その背景には当時の悲慘な戦争の被害を直接に被ったコメニウスの実体験と危機感が映し出されていることを想起させねばならないであろう。そうした彼の観点のなかから、後述の Oberlin (オベリン) の教育実践と関わりもあるいくつかを拾い上げ考察を加えてゆく。

2) 教育の必要性ー「人類を破滅から救うのは教育のみ」

「人類を破滅から救うのは教育のみ」ー これは先述の通り『大教授学』で繰り返し述べられる象徴的な章句のひとつであり、彼が教育の必要性を叫ぶ理由・根拠がこの言葉に凝縮されている。この点に関して『大教授学』の冒頭、「読者への挨拶」と続く献辞を追ってゆこう¹⁰。

巻頭の「読者への挨拶」ではまず、この書物が「大教授学、すなわちすべての人にすべての事柄を教授する普遍的な技法」を提示するものであり、それが教授する側と学ぶ側にとって苦痛や嫌悪ではなくして楽しさを感じさせ着実に学識・徳行・敬神を授ける方法であり、かつこれらを総合して普遍的な学校を設立する普遍的な技法であると述べている。しかしながらこうした考えが夢物語、大言壮語と批判されることを予測しつつ、その緊急性を説明するのが次の言葉である。

「事態は非常に重大である。すべての人がその成功を祈り、慎重に検討せねばならない。それが可能な限り協力的に推進されることが、人類すべての救済にかかってく

るのである¹¹。」

この「人類の救い・救済」というモチーフは「読者への挨拶」において以下のように再び現れる。

「私がこの本を読もうとする読者に、人類の救済の名において懇願することは…¹²」

そして献辞（「すべての人間界の責任者、（すなわち）政治指導者、教会牧師、学校の校長、教師、保護者に一聖霊の恩寵によって、我らの主イエス・キリストの父である神の平和のうちに」）において、さらに断固たる調子で反復されてゆく。

「聖なる書が記し教えているのは以下のことである。地上における正しい教育を打ち立てる以外に、人類を破滅から（*corruptelas*）救う（正す）手段はない¹³」

「結論として、人類の破滅に対する救済策を講ずべきであれば、それは注意深く丁寧な青少年の教育に他ならないであろう¹⁴。」

単なる「教育」が人類を破滅から救う唯一の手段であるとの主張は、現代の目には大仰な修辭的表現にしか映らない。しかし彼が記しているように「祖国の破滅と全ドイツの悲惨¹⁵」すなわち「あれほどの戦争の残忍と惨状¹⁶」という表現が示す、三十年戦争をはじめとして彼が体験したヨーロッパ、なかんずくボヘミアにおける戦禍が、彼をして「人類の破滅」と言わしめているのである。先に述べたとおり当時のボヘミアは国王であるハプスブルクのフェルディナント（位 1617-1637）の支配のもとにあったが、彼のプロテスタントに対する厳しい政策がプロテスタント・ボヘミア貴族の反発を招き、これが発端となってあの三十年戦争が勃発した。ボヘミア議会は一時はフェルディナントを廃位、プロテスタントであるドイツのライン・ファルツ侯を国王に迎えるがビーラー・ホラ（白山）の戦いでスペイン軍と結んだハプスブルクにプロテスタント勢力は敢え無く敗れ、王位に返り咲いたフェルディナント―そして今や神聖ローマ皇帝フェルディナント 2 世―は、徹底したカトリック化・プロテスタント排除政策を推し進め、国内のプロテスタント追放令を発した。コメニウスがボヘミア兄弟団の信徒を率いて亡命を余儀なくされたのはこの時であった。戦禍はカロ Jacques Callot（1592-1635）¹⁷の版画が今日に伝えている。

3) 「すべての人にすべての事を」

そのような人間社会の愚闇と惨状を目の当たりにしながらも、コメニウスがその救済策として「教育」を掲げたのは何故か。この問いについては第 1 章の章題「人間は最も完璧で最も卓越した被造物である」が端的な回答となろう。以下第 5 章までの各章で、コメニウスは「教育」を人類の破滅からの救済策とすること、および「すべての人にすべての事」を教授する汎教育（パンソフィア）の必要性の根拠を論じている。

自著『地上の迷宮と魂の楽園』で描き出した如く、コメニウスは当時の人間社会の腐敗と墮落、暗愚を身をもって知っていた。しかし彼にとっての「人間」は、最初からそうした愚かしく救いがたい存在ではなかった。それについて、献辞から第 5 章にかけて展開される彼の主張は、概略すると次の如くである。

神によって創造され樂園におかれた人間は、被造物の中でも最も精妙であり、神の似像たるこの存在には神の知恵が根を下ろしていた。そうした初めの状態に留まる限り人間は神にとっての大いなる喜びであったが、彼らは樂園を追放されて地上の荒野に追いやられ自らも荒野となり果てた。言うまでもなくこれは「創世記」（『旧約聖書』）に基づく記述であるが、これ以降コメニウスは『旧約聖書』、『新約聖書』から教父思想、古典古代の哲学思想に至るまで自在に引用しつつ、徹頭徹尾神学的見地から持論を展開してゆくのである。続けよう。

そのように人間は神から授けられた知恵を用いて善へと向かうべきであったものを、現在はそれが敵意、不正、虚偽にとって代わられている。つまり神によって創造された人間は本来神の似像であり善に向かうべき存在であったにも拘わらず、見る影もなく墮落してしまっているのが現在の姿である、と言うのである。

そして第2章、第3章において、人間の究極の目的は現世ではなく永遠の生命―来世にあるとし、この世の生はそうした来世への準備に過ぎないと述べてゆく。コメニウスの持つ伝統的なキリスト教的来世観の表出と言えよう。これに対して、第4章「永遠への準備には3段階がある―自分自身を知り支配し神に向けることであり、同時にそれはすべてのものに関しても同様である」では現世における人間の生の目的について論じられる。

コメニウスは次のように主張する。人間の究極の目的は、神とともにある永遠の幸福であることは明白である。そしてその他の目的、すなわちこの究極の目的への通過点である現世の生命に示されている目的は、人間自らが以下のような存在になるということである。

「I. 理性を備えた被造物 *Creatura rationalis*

II. 他の被造物の支配者である被造物 *Creatura creaturaum domina*

III. 創造主の似像であり無上の喜びである被造物 *Creatura creatoris sui imago et delictum*¹⁸」

続いて彼は上記の三点について次のように解説を加える。

I「理性を備えた被造物」とは、すべてのものの探索者であり、命名者であり、解明者としての存在であり、それ故にすべての事物の根拠を知ってこそ初めて「理性を備えた被造物」となることができる。II「他の被造物の支配者」ということは、すべてのものをその本来の目的に向けて利用することであり、また諸々の被造物の中にあつて尊厳と聖性をもってふるまうことであつて、それぞれの事物をいつ、どこで、どのように、どこまで利用すべきかを知らねばならないのである。最後にIII「神の似像である被造物」として、その原型すなわち神を限りなく表現する存在でなければならない。これは換言すれば、以下の如き存在となるべきことを意味している。

「I. すべての事を知る者となること

II. 自分と他のものの支配者であること

III. あらゆる存在の根源である神にすべてを帰する証人となること」

さらにコメニウスはそのために必要な要素を以下のように提示する。

「Ⅰ．学識 Eruditio

Ⅱ．徳性、あるいは尊敬に値する徳行 Virtus seu mores honesti

Ⅲ．宗教性、あるいは敬神 Religio seu pietas¹⁹⁾」

つまりは最終的にこれらがコメニウスの『大教授学』のなかで主張される「教授すべきすべてを包括する三領域」として結論づけられ、以降の章で検討の対象となってゆくのである。

このように『大教授学』を象徴する「すべての人にすべての事を」という提起について、彼は一貫して神学的根拠を披歴していることがわかる。後世の「近代教育学の父」という評価にも拘らず、しかしコメニウスがボヘミア兄弟団の司祭であったことも考え合わせれば至極当然の事でもあろう。（「読者への挨拶」でいみじくもコメニウスは「一介の神学者（コメニウスを指す）が学校に関する問題を研究するのは逸脱である、と考えるのであれば…²⁰⁾」と自らを定義している。）近代の視点からは幾分違和感がないわけではない論拠であるが、西ローマ帝国の崩壊以来長きに亘ってヨーロッパの「教育」を管轄してきたのが各修道会をはじめとするキリスト教組織であったことに鑑みれば、このような論法も特に驚くにはあたらない。

要約すれば、コメニウスにとって現在の人間の有様は本来のあるべき姿から逸脱しているものであり、「創世記」にみられる創造主（神）によって創造された時点での人間は、理性を与えられすべての被造物の支配を託された神の似像、創造主によって大いに嘉せられた存在であった。そうした「人間」の現世における役割は、上記のごとき存在として人間本来の務めを果たすことである。それ故に、現在（当時）の破滅的状态の人間をあるべき姿に回復させるため、またすべてを知ることによってその役割を果たすために「すべての人にすべての事を教授する」「教育」の実施が急務となるのである。

さらにコメニウスは、第6章でその章題が示す通り「人間は人間になるために、人間として形成される必要がある」ことについて論じる。第5章において学識、徳性、敬神の種子は本来的に人間に備わるとしたコメニウスであるが、そうしたものは自然そのものが与えてくれるわけではなく、学ぶことによって獲得されると訴える。「人は、人間をまさに“教育され得る動物”と定義したが、教育なしに人間になることは不可能である²¹⁾。」彼の主張するより現実的な「教育の必要性の根拠」である。

いずれにしてもこれからコメニウスは「Ⅰ．学識、Ⅱ．徳性あるいは尊敬に値する徳行 Ⅲ．宗教性、あるいは敬神」を教育すべき三領域と定義し、これらに関する教授法を詳細に亘って論じてゆくのである。

4) 学校

さて周知のとおり強く教育の必要性を訴えているコメニウスであるが、それが「学校」における教育であることを改めて認識させられるのが第8章以下であり、学校教育の普及

が当然となった今日、その意義と価値を再認識させられる記述である。

第8章のタイトルが示す通り、青少年は一緒に教育（形成）すべきで、そのためには学校が必要であるとするコメニウスの主張は、概ね以下のとおりである。

本来教育は親の仕事であったが、人間の仕事次第に増加するにつれ、子供の教育に専念できる知識・能力・時間を備えた親は少なくなった。またそれぞれ専門の職業が存在するという理由からも、専門の職業としての教育が行われることが望ましい。また別の観点として、青少年は集団の一員として教育を受けることにより、互いに相手を手本とし刺激を受けて学業成果も楽しさも倍増する。そのように学校の必要性和効果を説きつつ、第9章「男女両性のすべての青少年が学校に託されねばならない」ではさらに「すべての人」が学校に行くべきであるとの主張を展開させる。当時の社会的背景を考えれば身分や経済力の差によって多くの子供が教育を受ける機会を失っていたことは容易に察せられるが、彼は「すべての人」が教育を受けるべき理由として先に見た第4章の根拠を反復する。人間として生まれたものは誰でも、人間一理性を備えた被造者、被造物の支配者となり神の似像を表現するという同一の目的を持って生まれた。そこから敷衍すれば、教育の必要性は身分・経済力の差は言うにおよばず男女差や能力差も超越し、生まれつき知能の働きの遅い者、弱い者も一層教育される必要があるというのがコメニウスの思想であり、現代風に表現するところのいわゆる「教育の平等」の理念はコメニウスにおいて徹底されているのである。この点に関して、例えば宗教改革者ルター Martin Luther (1483-1546) も都市の行政官に対し学校設置の必要性を説く文書を出し、ドイツ語教育、女子教育に関して言及もしている²²。しかし彼の場合は最終的に自らの宗教理念に即した社会的指導者の育成が目的であったことと比較すると、コメニウスの教育理念の特質がより明確化されるであろう。

そうした観点からも従来の学校が彼の理想とは程遠く、改革せねばならないことが第11章、第12章、第13章で論じられてゆく。その詳細に関しては本稿では割愛するが、さらに「学校」に関わるコメニウスの思想の中でいくつかの興味深い項目を挙げてゆきたい。

5) 年齢と発達段階

一般に、教育と子供の発達段階を関連付けて論じたことで知られる近代の著作は、周知のとおり J.J. ルソー Jean-Jacques Rousseau (1712-1778) の『エミール』*Emile ou de l'éducation* (1762) であろう。ここでルソーはエミールという少年を主人公に、子供の発達段階を区分し、それぞれに対応した教育について論じているが、コメニウスも1世紀ほど先んじて、子供の年齢とそれに適応する学校の種類という形で言及している。

今日ではいうまでもなく、初等教育は母国語の読み書きから始まる。しかしコメニウスの時代、またそれ以降もヨーロッパにおける母国語教育はラテン語教育より遅れて開始された。そうした背景を念頭に、第27章「年齢と発達段階に従って構築された学校の四段階について」におけるコメニウスの主張について述べたい。

「第 27 章 年齢と発達段階に従って構築された学校の四段階について」は、冒頭に職人の修行年限を例に引きつつ、学校教育も同様の段階を踏むべきであるとして始まる。コメニウスは幼児期から成年期（24 歳）までを均等に、幼児期、少年期、若年期、青年期と 4 つに区分する。そしてそれぞれの年齢に相応しい学校を以下の通り対応させているのである。

- 「Ⅰ．幼児期の学校 母親の膝
- Ⅱ．少年期の学校 初等学校、あるいは母国語学校
- Ⅲ．若年期の学校 ラテン語学校、あるいはギムナジウム
- Ⅳ．青年期の学校 大学（Academia）あるいは外国訪問²³」

このような区分とそれぞれの学校について、続けてコメニウスは以下のように解説を加える。幼児期には外部感覚 *sensus externi* がその対象 *objecta* を正しく識別する習慣をつけ、少年期（母国語学校）では内部感覚 *sensus interiores* すなわち想像力 *imaginativa* と記憶力 *memoria* の訓練と、その表現する器官（手と舌）の訓練を書く、描く、歌う、計算する、様々なものを記憶することを通じて行う。次なる段階である若年期（ギムナジウム）にはこうして感覚により集積された事物全部についての認識能力 *intellectus* と判断力 *judicium* が養成される。そして最後（青年期、大学）においては何より意志 *voluntas* に関わることを、調和 *harmonia* を保ち回復することを教える能力が培われる。

コメニウスは引き続き第 28 章から第 30 章で上記の各学校における教育の在り方を論じてゆくがここでは割愛し、彼の提起する年齢区分が「事物の段階的な教授」という教授方法にも起因することを挙げておきたい。第 16 章「教授と学習の全般的要件 すなわち成功せずにはいない種類の教授、学習法」では 9 つの基礎項目が挙げられており、その中の「基礎 7」において学習全体を学年（学級）*classes* に区分することが提起されている²⁴。コメニウスは段階を追った飛躍の無い教授法を提示する中で、先に学ばれた内容を次に続く学習内容の基礎・道標とするために、学年による区分を推奨しているのである。

また同章では従来の学校が知能の習熟に適切な時期を選んでおらず、さらに段階を追う学習もなされていないことを批判し、教育は少年期に開始し学習する対象（科目・内容）は年齢の段階に応じて配慮すべきであることを指摘している。

6) 母国語教育

先の章とも関連し、コメニウスの学校教育に関する思想から母国語教育について触れておきたい。すでに引用した第 27 章に、母親の教育に委ねられるべき幼年期に続き、少年期に適応した学校として母国語学校が挙げられている。彼の年齢区分に基づけば 6 歳から 12 歳にあたる初めての学校教育、現代でいう初等教育の時期である。今日的には初等教育において先ず母国語を学習することは至極当然の順序であろう。しかしヨーロッパにおいてはその形成期以来長きに亘り、学校で学ばれる語学すなわちラテン語であった。これはラテン語が公用語としての命脈を保ち続け、そうした言語を操る為政者、行政官、

学者、聖職者という支配階級の職に就くために習得されるべき言語と位置付けられたことから理解される。他方母国語はそうした対象から外れた存在であったため、学校で学ばれるものではなかった。アリエスによれば、17世紀フランスでカトリック教会によって運営された庶民階級を対象とした「小さな学校」petite école でさえ、まず教えられたのはラテン語による祈祷文、聖歌等であった²⁵。同国でフランス語の教育を実施したのは貧困階層の救済を目的としたラ・サール Jean-Baptiste de la Salle (1651-1719) のキリスト教学校修士会 Fratres Scholarum Christianarum (Frères des écoles Chrésiennes) による学校があるが、当時としてはむしろ例外的な存在であった。

こうした時代背景を考慮すれば、コメニウスが母国語を修得する学校を年齢・発達段階の理由をもって設定したことは注目に値しよう。これについてコメニウスは第29章「母国語学校の原型」において以下のように説明を加えている。

当時の教育学者ツェッパ、アルシュテットらは、母国語学校に就学させるべきは手工業の職に就く少年少女のみであって、さらに上の知能開発を求める者は直接ラテン語学校に進むべきであると主張しているが、これには異論がある。「私たちが目指すのは普遍的教育 generalis institution であり、人間として生まれたものすべてを人間としてのあらゆる資質に向けて教育することである²⁶。」それ故、彼らを一緒に導くことができるところまでは一緒に導かねばならず、そうすることによって互いに励まし合い、高め合い、また互いに謙遜し、協調し、奉仕し合う徳性を培わせたい。少年たちを早期に分断することで互いに対する優越感、輕蔑の契機を作ってはならない。また6歳という年齢で、既に学問か手工業か、どんな天職に向いているのかを決めてしまうのは早計である。富裕者、貴族、行政官の子供のみが親と同じ地位を得るため生まれてきたのではなく、彼らのためだけにラテン語学校の門戸を開いて他の者を締め出してはならない。

以上のコメニウスの主張には、18世紀末に開花するフランス革命の理念、「人権思想」と「平等思想」すら見出すことができまいか。

コメニウスの『大教授学』において、その教授方法の詳細はいうまでもなくこの著作の眼目であり、Oberlin (オベリン) の教育実践に関しても、その教授法においてはまさにコメニウスの提唱する直観教授の様々な興味深い実践例が示されるのである。しかしながらこの「直観教授」という教授方法は単独でも重要なテーマであるため検証は別の機会に譲り、次章から J.F.Oberlin (オベリン) の教育実践、特にバン・ドウ・ラ・ロッシュの公的学校 écoles publiques のカリキュラムを取り上げて考察をしてゆきたい。

3. J.F.Oberlin (オベリン)

1) J.F.Oberlin (オベリン) のボワル・ア・トリコテと公的学校

18世紀後半から19世紀にかけて、アルザスのバン・ドウ・ラ・ロッシュ地方で教育

と貧困解消のための事業に尽力した Jean Frédéric Oberlin (オベリン) (1740-1826) は、冒頭で記したとおり一冊の書物も残さず狭隘な山間の地で実践家として一生を過ごした人物である。彼自らコメニウスの『世界図絵』をテキストとして使用していたことから、コメニウスによる影響を覗うことができるが、ここではコメニウスの理念と Oberlin (オベリン) の実践を照らし合わせるにより、Oberlin (オベリン) の教育におけるコメニウスの要素・コメニウスの理念を検証することに留めることを確認しておきたい。

Oberlin (オベリン) が牧師として赴任したバン・ドゥ・ラ・ロッシュでは地形的・気候的な事情により、住民は極めて貧しい状況にあった。そのため彼は、何よりも住民の貧困解消を自らの責務として数々の事業を成してゆくが、とりわけ注目に値するのが教育に関する事業であった。すなわち彼は教育による知識獲得によって人々の経済的自立・生活改善を目指したのである。

コメニウスの主張との関連からも、まずは彼が「学校」教育を、読み書きもままならない人々が暮らすこの山間の忘れ去られた土地で実現したことを強調せねばなるまい。コメニウスの「教育の必要性は身分・経済力の差は言うにおよばず男女差や能力差も超越する。生まれつき知能の働きの遅い者、弱い者も一層教育される必要がある」とする考えの具現化が、ここに達成されるのである。

それを示すためにまず、1770 年に創設された「編み物学校」*écoles à tricoter* 別名「ポワル・ア・トリコテ」*pœles à tricoter* と呼ばれる幼児のための学校を上げねばならないであろう。フレーベル Friedrich Wilhelm August Fröbel (1782-1852) が幼稚園を創設した 1840 年に 70 年も先駆けての開校であったが、この幼児のための学校にはさらに数多くの特筆すべき近代的要素がある。この学校の対象年齢は 3,4 歳から 6,7 歳であり、こうした初等学校以前の幼児学校としてはヨーロッパで最も初期のものであろう。また教師も男性ではなく、幼児たちの母親に相当する年齢の若い女性たちであった。そこで教えられた科目は、フランス語、野外における動植物や鉱物の観察、採取やスケッチ、簡単な地理、礼儀作法・生活習慣、これらに加えてこの学校の名称の由来となった簡単な編み物であり、先述の「小さな学校」で教えられていたのがラテン語の祈祷文や聖歌の暗誦等であったことに比較すれば驚くほどの多様さと近代性を示している。

この「ポワル・ア・トリコテ」に続く学校が、バン・ドゥ・ラ・ロッシュの公的學校 *écoles publiques* である。対象年齢は 6,7 歳から 16 歳であったが、16 歳までの就学は義務化され教区民には教育税が課せられており、段階的にはあるが、バン・ドゥ・ラ・ロッシュ地方の 5 村すべてに各 1 校公的學校が設置された。1789 年の革命を機にフランスにおいても公教育制度の必要性に関する議論は一挙に加速する。しかし教育に対する国家と自治体の責任を明確化した 1833 年のギゾー法 (1833 年 6 月 28 日初等教育法) を経て、1881 年から 1886 年にかけてのいわゆるフェリー法に至りようやくフランス近代公教育原則が確立したことを考えると、Oberlin (オベリン) のバン・

ドウ・ラ・ロッシュの公的学校は、国家に先行していち早く公教育制度を完成させたともいうことができる。

また Oberlin (オベリン) はこれらの学校の教師に対する配慮と規定も怠ることはなく、給与など待遇を改善し、衣食住を保証した。彼の時代の教師は、現在のように独立した職業とは程遠く、多くは教会の堂守などを兼務しようやく糧を得ることができるような状況であった。ほぼ同時代の学校と教師の様子が谷川稔『十字架と三色旗』に次のように記されている。

「したがって、19 世紀前半とりわけギゾー法以前の初等教員は、ほとんど独立的な職業とは見なされなかった。じじつ、農村の教師は司祭の助手、教会の堂守を兼ねているのが通例であった。授業といっても、ごく簡単な読み書きのほかは、教理問答や祈りの暗唱、聖歌の練習などが中心で、村の子供たちが初聖体拝領（およそ 12 歳）を受けるまでの下準備といった内容にすぎない…（略）…定収は法的に規定されているわけでもなく、生徒の親から卵や薪など生活物資の現物供与を受けるだけというケースもまれではなかった²⁷。」

教師の待遇のみならず当時の村落部の学校の様相は概ねこうしたものであったが、この現状と比較しても Oberlin (オベリン) の教育実践の近代性をうかがい知ることができる。彼の公的学校の教師はすべてバン・ドウ・ラ・ロッシュ地方出身の男性たちであり、彼ら自身高い教育を受けていたわけではない。教師に相応しい実力を持った人物を都会から招聘した方が効率的であったことは明白であるが、それでもなお地元出身者を教師として選んだのは、ほかのすべての職業同様、地域の人材育成の意味があった。1833 年のギゾー法では県・市町村における学校の設置基準と同時に、教員養成に関して各県に 1 校師範学校を設置することが規定された。ここからもわかるように、教育において教員養成が欠くことのできない要件であるが、彼は自ら教師たちの指導にあたり、さらに週一回の模擬授業など教師の研修も行い、教育に相応しい能力を持つ教員の養成にも尽力した。教授者たる教師の在り方の規定と教育技術修得の重視は、このように公教育政策と重なる極めて近代の方針であると同時に、コメニウスの『大教授学』執筆の目的そのもの―「すべての人にすべての事柄を教授する」―とも重なることを書き留めておきたい。

こうした Oberlin (オベリン) の教育実践、彼の運営した幼児学校（ポワル・ア・トリコテ）と公的学校は、貧困解消という人道的目的と就学義務化という対策からも、十分にコメニウスの「すべての人にすべての事を」という汎教育の理念との共通点を見出すことができる。加えて、近代的な週単位の時間割、学校規則などコメニウスの主張に重なる多くの実践が記録されているが、ここでは、Oberlin (オベリン) によるバン・ドウ・ラ・ロッシュの公的学校のカリキュラムを取り上げ、そこに見るコメニウスの理念の検証を試みたい。

2) バン・ドウ・ラ・ロッシュの公的学校 *écoles publiques* のカリキュラム

当時の村落部の学校に関しては先の引用に見るごとく、制度化もされずほとんどお座

なりの教育内容しか持たないのが一般的であったが、Oberlin（オベリン）は幼児学校ボ
ワル・ア・トリコテに続く 16 歳までを対象とした公的学校への就学を義務化し、幅広い
領域の科目を提供した。その内容は科目の多様さのみならず、各学年ごとの組織的な構築
を特色とするものであった。それが以下に記載するカリキュラム（プログラム）である。

バン・ドゥ・ラ・ロッシュの公的学校のカリキュラム

1. 最年少または初級課程

〔第 1 学年〕

1. 悪習の放棄
2. よい習慣の習得—従順、誠実、秩序、善意、善行など
3. アルファベット小文字の理解
4. 本無しでの綴り
5. 難しい単語とシラブルをうまく発音すること、朗読の際の正しい抑揚
6. 提示されたものを正しいフランス語で言う
7. 道徳と宗教の最初の概念

〔第 2 学年〕

1. 既習の知識の反復と展開
2. 本の中からの（より難しい単語の）綴り、大文字の習得
3. 魂の機能の理解
4. 時と季節の概念、地上の生産物、動物、人間の概念、同様に人間の栄養、衣服、
住居の概念の習得。職業と賃金、財産、寄付、両替、遺産、貨幣、買入れ、借金、
負債、利子の概念。家族、村落、市の立つ町、都市の概念。裁判と訴訟、行政長
官、国家、公共福祉の概念。近隣・遠隔の国々と人々、自然の推移、神の力、恵、
知恵の概念、魂の不死、徳と悪徳、良心の喚起と神への従順およびイエス・キリ
ストの手本に習うことによる救済への道の概念の習得
5. 1000 までを、順・逆に数えること、100 までの足し算、引き算のために算数
の本を使用すること

〔第 3 学年〕

1. 既習の概念の復習と前出の練習の反復
2. 説明され既によく知っている本を流暢に読むことを学ぶ
3. 小文字をきちんと読みやすく均一に（対称に）書く
4. 10 までの数を様々な組み合わせで縦横に書く
5. 石板上での抽象的数量の足し算、引き算、掛け算、引き算

2. 中級課程

〔第 4 学年〕

1. 既習の概念の復習と前出の練習の反復

2. 読みの練習
3. 地理的要素の説明、すなわち概念の同定—島、海峡、岬、海港など。城砦、城、通行料について、政治体制、言語、宗教における相違を語る。
4. テキスト無しでの地図の説明
5. 数学の第2教程—抽象的数量の分数から三数法まで
6. 第2級の書法（ペンマンシップ）
7. ドイツ文字の学習
8. 楽譜に従った歌唱

〔第5学年〕

1. 復習
2. 読み書きの実践
3. 印刷物と筆写本の読み
4. 歌唱

〔第6学年〕

1. 復習
2. 実用的数量による計算の四則の明示
3. テキストを伴った地形図の学習
4. 綴りなしのドイツ語の読み
5. 歌唱の継続

3. 大人のための過程（上級・高学年のための過程²⁸⁾）

〔第7学年〕

1. 前学年の練習の復習
2. 自然誌、特に植物学
3. 約束手形、領収書、計算書等の書き方の学習
4. 歌唱の継続

〔第8学年〕

1. 上述のとおり、復習
2. 三数法までの応用数学
3. さらに詳細な地理学
4. 世界史上の最も重要な事件
5. ドイツ語からフランス語への訳（口頭）
6. 歌唱の継続

〔第9学年〕

1. 復習
2. 農業、登録（登記）に関する事項の基本、および健康規則の基本
3. 幾何学、物理学、天文学の基礎

4. フランス文字によるフランス語からドイツ語への翻訳（筆記）
5. 労働者のための書簡、領収書、計算書の作成
6. 宗教とそのエヴィデンス
7. 自然科学および人文科学の一般的概念
8. 歌唱
9. 羽ペンの削り方²⁹

以上のOberlin（オベリン）の教育カリキュラムは、現代から見れば特に驚くに値するものではないが、教育制度確立以前のフランス村落部の教育カリキュラムであることを前提とすれば驚異的な内容の充実といえよう。『大教授学』の内容も念頭に、その特徴を挙げてゆけば次のようになるだろう。

現代においては当然のシステムであるが、まずは「学年」を設定し段階的に教育内容を展開させている点である。コメニウスは『大教授学』の中で具体的な教授方法の公式ともいえる「基礎」の数々を第16章（教授と学習の全般的要件）で提示しているが、そのいくつかをこのカリキュラムは包含している。

コメニウスによれば「自然は適切な時期に留意する³⁰」（基礎第1）すなわち「学習すべき対象（科目・内容）はすべて年齢段階に応じて配置され、生徒の理解できるもの以外は学ばせない³¹」。あるいは「自然は飛躍せず、段階を追って進む³²」（基礎7）すなわち「学習全体を注意深く学年 *classa* に分け、それぞれの段階が次の段階を明るく照らすようにする³³」。つまり生徒の年齢に応じ彼らが理解できる教科・内容から段階的に教授するという主張である。

これに対してOberlin（オベリン）のカリキュラムを確認すると、非常に明白なところでは第2学年以降必ず「復習」が授業項目として記載されており、「学習全体を注意深く学年 *classa* に分け、それぞれの段階が次の段階を明るく照らすようにする」というコメニウスによる学年設定の意義をここに見出すことができる。その他、フランス語であれば小文字の理解から始まり、次の学年ではより難しい単語の綴りと大文字の習得、文字の筆記、読みの練習、読み書きの実践と段階的に進展し、算数においても第2学年の数を数えることと足し算・引き算に始まり、10までの数を様々な組み合わせで縦横に書く、抽象的数量の分数から三数法まで、というように進展させてゆく。また地理の学習に関しては、第4学年で地理的要素の説明（すなわち概念の同定—島、海峡、岬、海港など）から始めて、第6学年のテキストを伴った地形図の学習、第8学年のさらに詳細な地理学と進む。こうしたプログラムは、コメニウスの言う普遍的学識の基礎をまず子供に教え、最初には全体像をつかむために単純な基本から教えその後で少しずつ詳しく教えるべき、とする主張（基礎6）³⁴が明白に具現化されているといえるであろう。

3) Oberlin（オベリン）における「すべての人にすべての事を」

このように上記のカリキュラムには、コメニウスの提唱する技法としての教授方法

の原則を確認することができる。しかしさらにこのカリキュラムを詳しく検証すると、Oberlin（オベリン）の独自性が浮かび上がるのである。初級課程と中級課程、年齢としては6,7歳から11,12歳まではフランス語、算数、地理など普遍的な教科が置かれているが、「大人のための課程」（年齢的には12,13歳から15,16歳）の段階に到達した時点で教えられる教科において、注目すべき2つの要素が並立するようになる。ひとつは約束手形、領収書、計算書、“労働者のための”書簡、農業の基本といった実務的・職業教育的要素であり、他方の自然史、地理学、応用数学、幾何学、物理学、天文学の基礎、自然科学・人文科学の一般概念といったより高度な教養教育的要素である。つまりこの学校では、中級課程（11,12歳くらい）までに一般的基礎知識、その後就学終了期までの課程（12,13歳から16歳）で実務的・職業的科目と教養教育的科目を並行して教授することが規定されているのである。

無論この実務的・職業的要素は、この地方固有の地域的事情への配慮の反映に他ならない。しかしそうした教科と併せて教養教育的、言い換えればより高度な教科を組み入れている点には、コメニウスの「6歳という年齢から学問か手工業か、どんな天職に向いているのかを決めてしまうのは早計である。富裕者、貴族、行政官の子供のみが親と同じ地位を得るため生まれてきたのではなく、ラテン語学校を彼らのためだけに門戸を開いて他の者を締め出してはならない。」という言葉についてのOberlin（オベリン）の立場での実践、パラフレーズであると考えることができるのではあるまいか。

しかしまた、ここにはコメニウスの理念としての「すべての人にすべての事を」を検証することができる。

先ずOberlin（オベリン）はコメニウスの提唱そのままに、自らの担当する教区バン・ドウ・ラ・ロッシュ地方の児童の就学を義務化することによって、まさしく「すべての人に」教育を授けることを実現した。さらに先述のカリキュラムに見るように、学年を設定し段階を踏んで「すべての事」と言い得るような多様かつ多角的な教科の教授を行う。また本稿では割愛したが、コメニウスのやはり代名詞ともいえる直観教授をも、様々な教材³⁵を駆使した授業によって実践している。

コメニウスの「すべての人にすべての事を」教える教育が、1世紀半の時を隔ててアルザスのOberlin（オベリン）において結実したといえるのであるが、その背景もまた共通の要素を包含している。『大教授学』によればコメニウスが教育の重要性、学校教育改革の緊急性を痛感したのは、彼が体験した過酷な戦争をはじめとした人間の破滅の故であり、Oberlin（オベリン）がバン・ドウ・ラ・ロッシュに学校を作り教育実践に尽力したのは、この地域の極度の貧困解消のためであった。規模の大小の相違こそあれ、戦禍も貧困もいずれも人間存在の悲惨と荒廃をもたらすことに違いはなく、コメニウスが提唱したその救済の手段としての教育をOberlin（オベリン）が実証したといえることができるであろう。

結語

コメニウスにおいては三十年戦争をはじめとするヨーロッパの戦乱がその教育理念に大きな影を落とし、しかしそれ故にこそ彼の教育の根本を問いつ実践的な著作を残した。Oberlin（オベリン）は直接の戦火を被ったわけではない。その点はコメニウスと相違するが、教育の必要性、とりわけ「すべての人にすべての事を」という理念はOberlin（オベリン）の教育実践の根幹を貫いている。彼において「戦火」ではなく、それは「貧困」であった。「人類を救うのは教育のみ」というコメニウスの理念は、より限定された地域において実行に移されたのである。

先にも述べたとおり、本稿においてはコメニウスの『大教授学』の理念とOberlin（オベリン）の実践を照らし合わせるにより、Oberlin（オベリン）の教育におけるコメニウスの要素・コメニウスの理念を検証することを試みたが、『大教授学』に関していえば「すべての人にすべての事を」という理念にほぼ限定し、もう一方のOberlin（オベリン）の教育実践もまた一部である公的学校のカリキュラムを例にとつてその理念の反映を探るに留めた。しかしながらそうした限定においてさえ、教育の必要性とその普遍性が再認識されるのである。

人間の本来の姿と現実のそれとの間の乖離、その本来の姿に立ち戻ることが理性を備えた被造物の支配者、神の似像たる人間の責務であり、そのために地上におけるすべてを知り得る教育が必要であるとするコメニウスの理念は壮大かつ深遠である。そしてここには人間に対する非難叱責とともに、神学的見地に基づく人間の超越性を基盤とする根本的な人間への肯定が厳存している。

凄まじい戦禍と極度の貧困という状況を打開する手段としての教育への希求が、こうした肯定観を礎としていることも、コメニウスの理念とOberlin（オベリン）の実践によって浮き彫りとなる。そこには近代初期まで継続する独自の来世観もまた大きく影響していることも付加しなければならないとはいえ、今日の状況下における教育の意義を改めて考えるとき、その近代的教授法のみならずこうした二人の理念と実践を確認・検証することは決して意味無きことではあるまい。教育とは、現状への批判とともに人間への根底的な肯定から提起され、またそれによって実践されねばならない。この二人の教育家の思想と業績は、そうした教育の側面を物語るものである。

注

- 1 Chalmel, L., *Oberlin;Le pasteur des Lumières*, 2006, Strasbourg, p. 228.
- 2 またはウヘルスキー・ブロード、あるいはストラージェニッツがその生誕地とされている。コメニウスの生涯に関しては Comenius, Jan Amos, *Art et enseignement de la prédication* (trad., par Larangé, Daniel S.,) Paris, L'Harmattan, 2006. Larangé Daniel S., *La parole de Dieu en Bohême et Moravie:La tradition de la predication dans l'Unité des frères de Jan Hus à Jan Amos Comenius*, Paris, L'Harmattan, 2008. 堀内守『コメニウスとその時代』玉川大学出版部、1984 年、井ノ口淳三『コメニウス教育学の研究』ミネルヴァ書房、1998 年、等を参照。
- 3 Unitas Fratrum, Unité des Frères (仏) の訳語はボヘミア同胞教団(堀内)、チェコ兄弟教団(井ノ口)、モラヴィア同胞団等があるが、本稿では「ボヘミア兄弟団」を使用する。
- 4 この亡命までに、代表作のひとつ『地上の迷宮と魂の樂園』が著されている。
- 5 Samuel Hartlib イギリスにおいてハートリブ・サークルを主導、政治・宗教・経済・知識活用における改革を目指し、多岐にわたって活動した。
- 6 フランスの宰相リシュリューも同様の招聘計画を立てていた。
- 7 Daniel S. Larangé による。堀内の前掲書ではレシュノへの期間は 1654 年である。
- 8 井ノ口淳三『コメニウス教育学の研究』ミネルヴァ書房、1998 年、104 ページ-107 ページ。『開かれた言語の扉』に関しては、同書の「第 6 章『言語の扉』の意義」を参照。
- 9 前掲書、225 ページ。
- 10 Comenius:*Magna Didactica*, Hants1968..
日本語訳に際しては以下の仏語版、日本語版を参照。
Comenius, *La grande didactique ou l'art de tout enseigner à tous*, Klincksiek, 2002.
コメニウス、梅根悟、勝田守一監修、鈴木秀男訳『世界教育学選集 24 大教授学 1』明治図書、1976 年。
コメニウス、梅根悟、勝田守一監修、鈴木秀雄訳『世界教育学選集 25 大教授学 2』明治図書、1976 年。
- 11 Comenius:Magna Didactica, Hants1968, pp. 12-13.
- 12 *Ibid.*, p. 13. (読者への挨拶)
- 13 *Ibid.*, p. 21.
- 14 *Ibid.*, p. 41.
- 15 *Ibid.*, p. 14.
- 16 *Ibid.*, p. 21.
- 17 ロレーヌ地方出身の版画家カロは「戦争の惨禍」Les grandes misères de la guerre (1633) に当時の戦争の悲惨を描き出している。
- 18 *Ibid.*, p. 38.
- 19 *Ibid.*, p. 39.
- 20 *Ibid.*, p. 15.
- 21 *Ibid.*, p. 49.
- 22 『キリスト教的学校を設立し、それを維持すべきことについて全ドイツ都市の市長、市議員に与える』(1524)、『人はその子を学校に入学させるべきことについての説教』(1530) など
- 23 *Ibid.*, p. 204.
- 24 この学年(学級)というシステムは近代の学校教育においてはごく当然のものであるが、17 世紀には一般的なものではなく、これを実施している学校はむしろごく少数派であった。革命以前のフランスの子供と教育については以下の書籍を参照。Ariès, Ph., *L'Enfant et la vie familiale sous l'A nsian Régime*, Paris 1973.

- 25 Ariès, Ph., *L'Enfant et la vie familiale sous l'Ancien Régime*, Paris 1973. p. 273.
- 26 *Op. cit.*, p. 212.
- 27 谷川稔『十字架と三色旗—もうひとつの近代フランス』山川出版社、1997年。145ページ～147ページ。
- 28 原文は「大人のための課程」という記述であるが、いわゆる大人のための課程ではなくむしろ高学年の生徒を意味するものと思われる。
- 29 Kurz, J. W., *John Frederic Oberlin*, 1976, Colorado, pp. 291-293.
- 30 *Op. cit.*, p. 95.
- 31 *Ibid.*, p. 96.
- 32 *Ibid.*, p. 103.
- 33 *Ibid.*, p. 104.
- 34 *Ibid.*, pp. 102-103.
- 35 Oberlin (オベリン) は動植物・鉱物・民族などの分野に亘る博物学的コレクションをはじめ、植物標本、植物拓本、様々な動物の姿と名称を描いたカード、模型、玩具、白地図などを作成し、自由に教師たちの授業に利用させていた。

資料

Comenius: *Magna Didactica*, Hants 1968..

Comenius, *La grande didactique ou l'art de tout enseigner à tous*, Klincksiek, 2002.

コメニウス 梅根悟、勝田守一監修、鈴木秀男訳『世界教育学選集 24 大教授学 1』明治図書、1976年

コメニウス 梅根悟、勝田守一監修、鈴木秀雄訳『世界教育学選集 25 大教授学 2』明治図書、1976年

J.A. コメニウス 井口淳三訳『世界図絵』平凡社、1995年、1983年

J.A. コメニウス 藤川輝夫訳 相馬伸一監修『地上の迷宮と魂の楽園』東信堂、2006年

参考文献

Ariès, Ph., *L'Enfant et la vie familiale sous l'Ancien Régime*, Paris, 1973.

(邦訳: フィリップ・アリエス / 中内敏夫、森田伸子訳『〈教育〉の誕生』新評論)

Avazini. G., ed., *Dictionnaire historique de l'éducation chrétienne d'expression française*, Paris, 2001

Chalmel, L., *Le Pasteur Oberlin*, Paris, 1999.

Chalmel, L., *Oberlin: Le pasteur des Lumières*, Strasbourg, 2006.

Comenius, Jan Amos, *Art et enseignement de la prédication* (trad., par Larangé, Daniel S.,) Paris, L'Harmattan, 2006.

Larangé Daniel S., *La parole de Dieu en Bohême et Moravie: La tradition de la prédication dans l'Unité des frères de Jan Hus à Jan Amos Comenius*, Paris, L'Harmattan, 2008.

Kurz, J. W., *John Frederic Oberlin*, Colorado, 1976. (邦訳: ジョン・W・カーツ / 柳原鐵太郎訳『ジョン＝フレデリック・オベリン—アルザスの土を耕し心を育んだ生涯』桜美林学園、2006年)

アンリ・ボグダン 高井道夫訳『東欧の歴史』中央公論社、1993年

井口淳三『コメニウス教育学の研究』ミネルヴァ書房、1998年

谷川 稔『十字架と三色旗—もうひとつの近代フランス』山川出版社、1997年

堀内 守『コメニウス研究』福村出版、1970年

堀内 守『コメニウスとその時代』玉川大学出版部、1984年